

編集後記

3年にわたって連載した、特集I「わが恩師よ」シリーズ、いかがでしたでしょうか。自分たちが恩師を語るができるチャンスを考えて、「これが最後の記事になるのではないかと」、思いのたけを書いてくださった校友もいらっしゃいます。「恩師」という言葉が死語になりつつある今日、高田高校の先生方はなんと素晴らしいのか、また何と幸せなのかと、つくづく感じます。

この特集は今回でいったん終了し、次回はまた上越への思いをテーマとして取り上げたいと考えています。皆様から次回テーマのご提案があれば、ぜひ編集部までお寄せください。

編集長 高橋 誠 (高26回)

今回、若い編集委員を迎え、編集会議はさらに活発になりました。総会では会場を回り『雪椿』の宣伝、キャプションのアイデアを募りました。

寄稿、座談会の出席など一人でも多くの同窓生の方々に誌面に登場してもらえるように、また戴いた御意見を参考に、これからも楽しい会報作りを工夫して参ります。

小林世紀子 (高11回)

旧制中学校の方からの原稿にはいつも目を見張る。それは語彙の豊富さで、へーエこんな的確な言葉使いがあるのかと驚かされる。そしてあわてて辞書を紐解いてみる。昨日、「源氏物語」一千年の記念講演会が横浜であった。遠い我孫子からでかけた。講師の「瀬戸内寂聴」さんの軽妙な語り口は1000年の時を経た「源氏物語」をぐっと身近に感じさせるものであった。外国人が日本へ来るときの必読書であると、日本固有

の文化を大切とつくづく思えた日であった。

加藤福子 (高14回)

東京の空はビルの合間に覗くばかりですが、薩摩の空は雄大です。盛夏の夕日などは圧倒的なスペクタクルで、櫻島が噴煙を上げるなか、タイミングよく飛ぶ「とんび」などを「翼竜」に見立てると、地球創世期の景色はかくや！…と。東京にも時折戻りますが、原始風景に羽根を伸ばしすぎて、バランスを取り戻すのに時間がかかります。

往復に飛行機を使いながら言うのもなんですが、江戸時代の「参勤交代」はたいへんでしたね。それにしても、その「旅」が日常的なものであったのか、非日常であったのでしょうか。(鹿児島にて)

祖父江ひろみ (高21回)

昨年に続き、高田で梅山登先生の指揮で合唱を歌おうと、合唱グループ“U“nagi(ゆうなぎ)に参加、「くびきの音楽祭」の舞台を目指していた。だが、文学の師と仰いできた小川国夫さんが4月に急逝、次いで父が逝き、まわりの風景が一変した。続く、暗がりの中での小川国夫さんと父への「喪の仕事」。高田の歌の友人、『雪椿』の編集部、いろいろなご縁の方から、たくさん温かい励ましのお言葉を頂いた。ただただ感謝。

『雪椿』の原稿依頼を通じて高田のことをまた思い出し、その思い出にも励まされた。人は思い出で繋がる…そのような『雪椿』であれかし、と思う。

真理子シャイフェレ (高21回)

正直に告白しますが、年に一度手元に届く支部会報『雪椿』を、これまではパラパラ飛ばし読みしていました。歴代編集部の方々ごめんなさい。ところが現金なもので、

自分が編集に参加することになった途端に、『雪椿』の宣伝や原稿依頼のお声かけをすることが多くなりました。そんなとき、最初は気取っていても、次第に気分は高生にに戻ります。子育てを終えてできたゆとりの時間を「こんな風を使うのも悪くないな」と思い始めている今日この頃です。

飛ばし読みして編集後記にたどり着いた方がいらしたら、もう一度ゆっくりページを繰ってみてください。原稿を寄せてくださった方々と編集部の郷土愛・母校愛が伝わりますように。

清水史枝（高27回）

今年の北京オリンピックでは、オグシオだとかスエマエだとかで、女子のバドミントンが結構注目されていました。実は日本の女子は、かつて4度も国別世界選手権で優勝しているほど、日本はバドミントンが強かったのですね。

偶然ですが、今回の特集IIでは、バドミントン部を取り上げています。高田高校が共学を始めたとき、女子が入部できる部活はバドミントン部だけだったそうです。そんな歴史もあり、今回の座談会でも、ご出席いただいた方は女性の人数の方が多いという状況でした。共学当初の女子学生の学校生活等の話題も出てきており、高田高校共学の歴史という観点でも、是非、特集IIをご覧ください。

久島士郎（高28回）

本年から『雪椿』の編集をお手伝いさせて頂くことになりました。毎年、何気なく手にしていた『雪椿』ですが、編集委員を含む関係者の献身的な作業の結晶であることを知りました。また、短い期間でしたが編集作業に携わることにより、郷里・高田に関する新たな発見も沢山ありました。

いつのまにか高田を離れて30年もの歳月が経ってしまいましたが、“もっと高田のことが知りたい”、“もっと高田との繋がりを深めたい”との思いも強くなりました。微力ですが、今まで以上に皆様の母校愛、郷里に対する好奇心を満たせるような『雪椿』を目指して、編集の輪の中でがんばりたいと思います。どうぞ、よろしくお願い致します。

三村 到（高30回）

ふとしたご縁で『雪椿』の編集に参加させて頂くことになりました。それだけで嬉しく思っていたのですが、原稿が掲載されることになり、とても感謝しております。

先日、実家の糸魚川から大糸線に乗って、青木湖、中綱湖周辺を散策しました。翡翠色に輝く湖面、鼻腔をくすぐる草の匂い、水音と葉音だけの世界はとても魅力的で、一瞬別世界に迷い込んだような気分になりました。ローカル線の旅は待ち時間が非常に長く、せっかちな私にはもどかしいのですが、思い出に強く残るのは、このような旅なのでしょう。ローカル線の旅同様、時間をかけてでも、皆様の心に残る原稿を書きたいという想いを新たにしました。

児島香世（高37回）

『雪椿』の編集に参加させていただき、2年が経過致しました。企画の段階から、座談会、編集、校正など諸先輩方に助けられながら、毎年、冊子として「形」になる達成感を共有できるところが素晴らしいです。高橋様をはじめとした編集部の皆様に本当に感謝いたします。

また、昨年母校で実施した「未来展望セミナー」を本誌でも取上げておりますので、新しい東京支部の活動の一つとしてご理解いただければと思います。

佐藤恵子（高40回）